

むかし、あるところに、ひとり者の若者が住んでいました。

あるとき、若者は、山で美しい娘と出会って、夫婦になりました。妻は、若者に、「山から帰ったときは、必ず、家の外から『今帰った』と声をかけてくださいね」といいました。若者は、いつも、いわれたとおりにしていました。

やがて、ふたりには、かわいい赤ん坊が生まれました。

ある日、若者は、山から帰って来て、声をかけないでだまって家の中に入ってしまった。すると、白へびが、部屋いっぱいにとぐろを巻いていました。若者がおどろいてみると、白へびがいました。

「わたしは、あなたの妻で、山にすんでいた白へびです。いつもあなたを見ていて、あなたの妻になりたくてやってきました。こうして赤ん坊も生まれて幸せでしたが、ほんとうのすがたを見られてしまつては、もうここにいることはできません」

白へびは、自分の片方の目玉をくりぬいて、赤ん坊ににぎらせました。そして、若者に、「どうか、この子を丈夫に育ててくださいね」といって、出て行きました。若者が後を付けて行くと、白へびは山奥の池の中にすがたを消しました。

赤ん坊は、母の目玉をなめて、大きくなっていきました。

そのうち、目玉は小さくなって、なくなつてしまいました。すると、白へびがまた、すがたをあらわして、もう片方の目玉をくりぬいて、赤ん坊にわたしました。白へびは、若者に、

「目玉がふたつともなくなつたので、昼と夜の区別がつかなくなりました。どうか、鐘つき堂を立てて、朝は三つ、夜は六つ、鐘を鳴らして教えてください」といって、帰って行きました。

若者は、池のひとりにお寺を立てて、鐘つき堂をこしらえました。そして、毎日、朝に三つ、夜に六つ、鐘を鳴らしたということです。

このお寺は龍泉寺といって、今でも奈良県吉野の天川村にあります。